

ていたときは、コース上にある老生のポールを、何度かコース外に打ち飛ばしました。

四つ葉のクローバを見つけれない老生が、軽妙なつつこみ合いを期待し、葉をちぎって、「うわあ！すごいのを見つけた。二つ葉だ。これはもつとすごい！ほらっ、一つ葉だ。」と言ったときも、うんざりした表情を隠さず、まことに冷やかでした。

そのようなとき、どう接したらよいのか、悩みましたが、卑怯な手を使ってまで勝とうという気は毛頭ありませんので、この一点だけはA男に伝えようと思いましたが。教育相談の場においては、全面的に受容することが大切ですが、「駄目なものは駄目。許されないことは許されない。」とする壁になること、すなわち、対決的に指導することも、教育相談員の大切な役割と考えたのです。

そこで、ある日、児童館の体育館の床に座って、話し込みました。

「私はズルをしてまでA男君に勝ちたいたなんて、全く考えていないよ。いつも、A男君が、思いつき運動して、心地よい汗をたくさん流して、気持ちもスッキリできれば……、と願っているよ。だから、『卑怯だ。』と言われると、とても残念な気持ちになるんだ。」

話し始めると、A男があぐらのような

姿勢から正座に居すまいを正しました。

「足、痛いでしょう？崩さない？」と言っても、正座を続け、眼をきりっと見開いて老生の話に耳を傾けていました……。

話が終わったとき、A男は、痺れてすぐに立ち上がれない両足をさすりながら、「そうですね。第一、狙ってエッジボールやネットインなんて打てませんよね。」と言いました。

その後、A男の足の痺れの回復を待って、卓球を再開しました。

そして、エッジボールやネットインは卓球には付物ですので、「今のは狙ったわけではないですよね？」「ううん、今のは狙ったんだよ。ごめん、ごめん。」「あつ、すみません。さっきのお返しです。」と、丁々発止のやりとりが繰り返され、A男の歯車と老生の歯車が少し噛み合ったような気がしました。



3ヶ月ほど前、A男と母親から、当時

の体験や思いをお聴きする機会がありました。この折のお話を、非常に苦しい小・中学生時代を過ごしたA男からの伝言として、今現在、不登校やいじめに悩み苦しんでいる子と親御さん、いじめ行為を繰り返している子、その子の養育責任を担っている親御さん、そして、先生方にお伝えしたいと存じます。

○小学生のころ、深刻な成長上の課題を抱えて苦しんでいたA男に、心ない言葉が投げられていた子たちの多くは、それがいじめ行為であるという自覚は乏しいと思う。しかし、やられた側はいつまでもその屈辱的な行為を忘れない……。もし今もいじめ行為を繰り返している子がいるならば、絶対に止めてほしい。特に、保育園から中学校までの10数年間、狭い集団で過ごす立科町では注意しなければならぬ。一旦こじれた児童・生徒の人間関係を修復するのは極めて難しく、その固着化した関係が何年も続くからだ。

○教師は、全面的にいじめられた子の立場に立って、対応と支援を丁寧、細やかに、親身に、粘り強く行うべきだが、いじめられている子の切なさや不安などを理解できない薄っぺらな正義感と人権感覚で、通り一遍の説諭や型通りの道徳授業、指導という名の下

に半強制的に書かせた謝罪の手紙によって一件落着……、といった教師がいる。さらに、配慮を著しく欠いた指導によって、教師の目の届かないところで、報復のないいじめ行為が起きていることに無頓着な教師がいる。子どもは、「勇気を出して正義告発しよう。」と言われても、このような教師には固く口を閉ざす。——いじめの指導は、子どもの「良心」に響かなければ、ほとんど実効はない。

○教育相談員に放たれた「矢」について訊くと、現在は大学生のA男が、「よくは覚えていないのですが、あのころは、いつも何かに苛々していたからだと思います。もちろん悪気などはなく、若気(?)の至りでした。本当に失礼しました。」と答えた。当時、A男の胸中には、小学生のときの辛い体験をふと思い出したときのやり切れないさと怒り、学習に対する焦り、高校進学への不安、教師不信などが激しく渦巻いていたのだ。にもかかわらず、教育相談員としての自分は、自己満足の「壁」でしかなかった……。申し訳なさと恥ずかしさを覚え、児童・生徒の、耳に聞こえる言葉や目に見える態度、表情だけにとらわれると、その時、その場における「その子理解」ができないことを、あらためて自戒した。